



Brain and Spinal Cord

Vol.28 No.3

The publication of the Japan Spina Bifida and Hydrocephalus Research Foundation "B & C" Vol. 28 No.3 November 2021



生田房弘先生

生田 房弘先生を偲んで

長嶋 達也 財団会長・兵庫県立こども病院名誉院長

私共の財団の初代選考委員長として発展に尽くしていただいた新潟大学名誉教授・生田房弘先生が、2021年5月26日にご逝去されました。世界的にもご高名な傑出した神経病理学者としての92年のご生涯でした。晩年90才を超えても著作を続けられ、明晰な頭脳により滋味深い文を残されました。

生田先生は、1929年（昭和4年）4月23日、新潟県出雲崎にお生まれになりました。小学校6年生の時に第二次世界大戦が勃発、旧制柏崎中学に入学後は2年生から勤労奉仕に明け暮れて、1945年の敗戦を16才で迎えておられます。1955年に新潟大学をご卒業になり、わが国の脳神経外科のパイオニアの一人である中田瑞穂教授のもとで脳神経外科を学ばれました。やがて神経病理学の分野に進まれ、1960年には米国 Montefiore 病院の Zimmerman 教授について神経病理学の研鑽を積まれました。1964年に帰国、1973年には新潟大学脳研究所の教授に、1985年には同研究所長に就任されて、1993年の退職まで在職されました。神経病理学の分野のご業績は偉大であり、2002年度「アメリカ神経病理学会（AANP）の Awards for Meritorious Contributions to Neuropathology」を受賞されました。1959年に始まったこの賞は、すでに第一線を退き神経病理学者としての生涯の業績が評価できる年齢に達した研究者を対象とするものであり、最高功労賞と呼ばれるものです。1995年には、日本に神経病理学の基礎を築いた功績に対する紫綬褒章を受章、2001年には勲三等旭日中綬章を受章されています。

生田先生と松本先生は稀に見る強い絆で結ばれていました。お二人のお生まれは1929年（生田）と1927年（松本）の2歳違い、ほぼ同じ年頃に第2次世界大戦の敗戦と戦後の混乱を経験し、大学卒業は1955年と1954年の1年違い、大学卒業後はアメリカが最も豊かで強かった時代である1960年と1962年の2年違いで留学、それぞれニューヨークの Zimmerman 教授（神経病理）とシカゴの Raimondi 教授（小児脳神経外科）という傑出した先生とその下に集まる世界中の俊英との生涯を通じての強いつながりの確立など、文字通り同時代を肩を並べて歩まれました。日本での脳研究の限られた世界で、傑出したお二人の出会いは必然であり、厚生労働省の研究班における研究などを通じて友情を深められたのではないかと拝察いたします。

生田先生は、退職を迎えられたのと同じ年の1993年12月9日の財団創設時から選考委員長として審査に携わってください、まさに財団の見識を示してられました。その年月は23年間におよび、その間の申請数は622件、そのうち受賞は92名、助成総額は8000万円になります。ある受賞者は、「財団の審査が厳しく倍率も高い中で選ばれたことは光栄であることに加えて、選考委員長である生田先生に選んでいただいた、ということが研究者として何よりの誇りであり、今後の研究への励みになります」と語られました。この言葉に最も大切なことが含まれています。初代会長の松本先生のご退任に合わせて、2016年の第22回の贈呈式を最後に選考委員長を退任されました。その重責は現選考委員長の山内康雄先生（鶴見緑地病院名誉院長）に引き継がれて今日に至っています。私自身は、会長引継ぎのための数年間、年一回の理事会と授賞式の折に



生田先生と研究助成を受賞された先生方（2012年3月）



生田選考委員長自ら助成金の贈呈書を手渡されたのは2011年および2012年度の2回（2011年3月）

聾咳に触れることができ、先生の研究に対する本物の厳しさや助成選考において示される見識と研究者に向ける優しさに触れることができたことはかけがえのない経験でした。

財団機関誌 Brain & Spinal Cord には、1999年第6巻4号に「三つ子の魂」、2003年第10巻4号に「脳や脊髄が出来てくるしくみ」、2009年第15巻6号に「当財団の研究助成のあり方と、申請を評価することの難しさ」を寄稿してくださり、折に触れ先生の考えておられることを分かりやすく示してくださいました。「三つ子の魂」は先生がお書きになられた文に繰り返し現れるキーワードでした。2009年の号には財団の限られた予算の中からいかにすれば有意義な研究助成をすることができるかということに深く思いを致されています。「今日の心のケアを含めた医療・医学のレベルと、現実に病める人々との間には、実は残念ながら、なお極めて大きなギャップがある」とお考えになり、莫大な予算を有する「国家的視点に似た視点」は当財団の取るべき視点ではなく、「当財団の研究は、国家的視点からは恐らく採用されないような、現実と理想の間にあるような問題で、しかしそれが現在実際に苦しんでおられる患者やその家族の方々にとっては切実で、少しでも心を含む癒しの『手当て』となる課題か、基礎的でも『病態解明に結びつく可能性が極めて大きい』ものであるなら、高い評価を与えるのが、当財団の研究助成のあり方である」と率直に書かれています。生田先生の感じておられた困難は、私たちにも引き継がれていますが、生田先生の初心に立ち返ることが大切だと感じています。

生田先生のご研究の全体像は私の理解をはるかに超えるものですし、私自身は生田先生の研究指導を直接受ける機会にも恵まれなかったのですが、実は大きな影響を受けており、論文を通じて学恩があるといえます。1984年に総説誌「神経研究の進歩」は「脳浮腫」の特集を組みました（28：599-628）。その中に生田先生による「病巣修復の一過程としての脳と末梢神経の浮腫—胎児脳形成機序の再現」が掲載されました。当時大学院の最終段階で水頭症や脳浮腫の研究を進めていた私は、その論文に書かれた新しい視点に強い印象を受け、博士論文に引用させていただきました。その後、小児脳神経外科医として未熟な脳の損傷と修復を目の当たりにする仕事に就き、生田先生から与えられたインスピレーションは現在も新鮮です。同誌は22年後の2006年に、「脳浮腫研究の進歩—基礎と臨床」という特集を再び組みました。同特集に「小児の脳浮腫—その病態」という総説を書かせていただく機会を得て（50：

281-290）、先生の論文にある病巣修復の一過程として『胎児脳形成機序の再現』が生じているのではないかという考え方を再び論文冒頭に引用させていただきました。それからまた15年を経た現在、改めて思い返しながらい生田先生との37年に及ぶつながり確かなものにしています。生田先生は「私の学問の行き着く先は子供の脳の発達なのです」と語っておられます（神戸新聞インタビュー2002年7月1日版）。1999年には「小児の脳神経」誌の特集に、「胎児脳の発達と病巣修復過程にみられる特異性」という論文を寄せられていますので、脳の病巣修復過程（神経再生）と『胎児脳形成機序の再現』という視点を様々にリフレインしながら生涯持ち続けられたのではないのでしょうか。

生田先生の財団選考委員長ご就任と新潟大学ご退職の時期がほぼ同時期であったため、その後折に触れてご自分の著作の別冊や新聞の記事などを財団に送って下さいました。いずれも貴重な内容が綴られたものなので、整理して財団に永く保存させていただきます。そのお人柄やお考えが記された興味深いものなので一部をご紹介します。その一つに、退職直後から書かれたスペインの神経解剖学者カハール先生に関する、1993年9月と1997年10月の2回のスペイン訪問に基づく6部からなる紀行・評伝があります。次に、恩師である中田瑞穂先生やZimmerman先生について書かれた思い出や退職まで所長を務めておられた新潟大学脳研究所の歴史に関わるものがあります。そして「自叙伝」には、幼いころや戦争中の記憶、米国留学中の思い出、母上の思い出、研究に関わる思い出などが詳しくつづられています。特に母上への思いは強く、生田先生という人格者がいかに形作られたかがにじみ出てくるようです。今一つ印象的な文は、お生まれになった出雲崎という地で強くつながる「良寛」への思いがあります。「16歳の時『良寛と貞信尼』に会う」という良寛との出会いについて記された文が残されています。16歳の時、すなわち敗戦の焼け跡で「良寛」に出会い、精神的にどれほど深い影響を受けたのでしょうか。生田先生の墓所は、良寛さんと同じ故郷の出雲崎に定められたとうかがっています。

私にとって生田先生は晩年に至っても気安く近づける存在ではありませんでした。学問的には仰ぎ見るばかりであり、お会いするたびに身の引き締まる思いがしたのは故・松本先生への思いと同じでした。松本先生と生田先生の気配を背中に感じながら、財団の運営に取り組むことをお誓いしてこの追悼文を終えたいと思います。心からご冥福をお祈り申し上げます。



左写真)
受賞者が発表される研究内容を聞いておられる生田先生と松本先生
研究助成金贈呈式（2007年3月）

右写真)
財団設立10周年記念事業 第3回
国際二分脊椎・水頭症シンポジウム
- 患者・家族と共に -
(2003年3月)

追記： 生田先生から財団に贈られた以下の著作を記録に残し、永く財団で保管いたします。

1. ミクロスコピアに収載されたもの

- ・ジンマーマン先生をめぐる私の先生方のことば ミクロスコピア 4 (4) : 157-164, 1987.
- ・アルツハイマーの生家と一人のドイツ人学者 ミクロスコピア 11 (1) : 12-14, 1994.
- ・アロイス・アルツハイマーのお墓 ミクロスコピア 12 (1) : 28-30, 1995.
- ・カハール先生のふるさとを訪ねてーⅠ ミクロスコピア 12 (4) : 234-242, 1995.
- ・カハール先生のふるさとを訪ねてーⅡ ミクロスコピア 13 (1) : 24-35, 1996.
- ・カハール先生のふるさとを訪ねてーⅢ ミクロスコピア 13 (2) : 76-83, 1996.
- ・カハール先生の跡を訪ねてーⅠ ヴァレンシア大学の教授となる ミクロスコピア 26 (2) : 116-122, 2009.
- ・カハール先生の跡を訪ねてーⅡ バルセロナ時代 ニューロン説の基盤を築く ミクロスコピア 26 (3) : 218-226, 2009.
- ・カハール先生の跡を訪ねてーⅢ サン・カルロス大学教授となってから ミクロスコピア 26 (4) : 298-306, 2009.
- ・アインシュタインの脳標本の由来 ミクロスコピア 26 (4) : 330-333, 2009.

医学書専門書店であると同時に、「良寛」を通じて新潟の文化を考える出版社でもある考古堂書店出版部から刊行された手作りの科学文芸誌『ミクロスコピア』は26年間にわたって刊行されてきましたが、26巻4号をもって終刊となっています。

2. 新潟脳外科病院院内誌に掲載された「自叙伝」

- ・私の自叙伝 第3回 「天皇陛下の命により…」戦時下の中学生のストライキ」新潟脳外科病院 院内報
- ・私の自叙伝 第4回 16歳のとき「良寛と貞心尼」に会う 新潟脳外科病院 院内報
- ・私の自叙伝 第6回 平澤興先生のことば「友はもっともっと大切に！」新潟脳外科病院 院内報
- ・私の自叙伝 第8回 師のジンマーマン(H.M.Zimmerman)先生から与えられたもの「求める道をひたすら歩き続けられる姿を見せて戴いたこと」新潟脳外科病院 院内報
- ・私の自叙伝 第13回 私の『母』新潟脳外科病院 院内報

第4回は生田先生ご自身からお送りいただきました。第3回、6回、8回、13回は新潟脳外科病院の武田先生が製本されたものとしてご遺族からお送りいただきました。

3. その他研究に関わるもの(掲載年順)

- ・アストロサイトの機能と脳病巣の修復 医学のあゆみ 159 (3) : 148-150, 1991.
- ・“脳死”例の剖検所見からみた個体の死の時刻 医学のあゆみ 172 (10) : 641-646, 1995.
- ・胎児脳の発達と病巣修復過程にみられる特異性について 小児の脳神経 24 (5) : 429-439, 1999.
- ・佐野圭司 生田先生のAANPの功労賞受賞を祝して Brain and Nerve 55 (2) : 177, 2003.
- ・生田房弘 アメリカ神経病理学会のAwards for Meritorious Contributions to Neuropathologyを授与されて Brain and Nerve 55 (2) : 178-181, 2003.
- ・脳機能形成に不可欠なアストロサイトの細胞分裂と移動運動 脳 21 6 (1) : 107-110, 2003.
- ・研究の道々で思ったこと-間(ま)、螺旋、生命の長さなど- 医療 62 (5) : 257-269, 2008.
- ・HE染色を入口とした神経病理学の始まり-ジンマーマン先生の無言の功績- BRAIN MEDICAL 26 (4) : 335-340, 2014.
- ・日本の脳外科の父“中田瑞穂”その足跡をたどる 新潟大学季刊広報誌「RIKKA」No.18, 2016 生田先生インタビュー収載
- ・脳組織を超低温保存したいと思いついてから 新潟大学医学部学生会報 109 : 22-25, 2018.
- ・水俣病症状の診断と認定と判決の根底にある実態 神経細胞脱落数から Brain and Nerve 70 (8) : 938-942, 2018.
- ・「温故創新」の語を前に 自身の90年を振り返り 思う 脳神経外科ジャーナル 28 (6) : 352-354, 2019.

4. Brain and Spinal Cord “B&C”への執筆

- ・平成7年度一般研究助成対象者審査の経過と選考結果について “B&C” 2 (2), 1996.
- ・平成8年度一般研究助成対象者審査の経過と選考結果について “B&C” 3 (2), 4 (1), 1997.
- ・脳の生い立ちに思う『三つ子の魂』 “B&C” 6 (4), 1999.
- ・脳や脊髄が出来てくるしくみ “B&C” 10 (4), 2003.
- ・研究助成について “B&C” 13 (4), 2006.
- ・当財団の研究助成のあり方と、申請を評価することの難しさ “B&C” 15 (6), 2009.

5. 新聞記事

- ・米神経病理学会 日本人初の最高功労賞 生田新大名誉教授に 新潟日報 2002.6.7.
- ・人 神戸新聞 2002.7.1.
- ・新大脳研の凍結脳標本群 原点に日米研究者の絆 新潟日報 2018.7.14.
- ・柏会を前に、自身の90年を振り返り 思う 柏中・柏高同窓会誌「怒涛」2020.3.10.